

スペイン語再帰構文の自律性と他律性

上田博人

はじめに¹

本稿では、スペイン語の再帰構文の文法的問題として次の3点を取り上げる。

- (A) 他動詞に再帰代名詞を付加するとどうして「自発」の意味で自動詞化するのか、自動詞化した再帰動詞と一般の自動詞との違いは何か(自動詞化問題)。
- (B) 全人称再帰構文と三人称専用再帰構文の異同は何か。なぜ三人称にだけ被動的(他律的と呼ぶ)自動化が起こるのか(三人称再帰問題)。
- (C) 再帰形の様々な意味の統一的説明は可能か。再帰代名詞のパラダイムはどのように形成されるのか(再帰形の同一性問題)。

以下では、自動詞・他動詞構造と比較しながらこれらの再帰動詞の問題点の解決を試みたい。

1. 意味構造

学校文法や一般の辞書では、動詞は直接目的語の有無によって他動詞と自動詞に分類されている。図式的には次のようになる。

- (1) a. ___ < +直接目的語 > ... 他動詞 (Juan abre la puerta.)
b. ___ < -直接目的語 > ... 自動詞 (La puerta abre.)

しかしここで意味役割を考えれば、他動詞構文の目的語(*la puerta*)が自動詞の主語に対応することがわかる。「ファンがドアを開ける」という事態におけるドアの意味的な役割は、「ドアが開く」という文の主語の役割と同等であると考えられる。このように平行する2つの構文を許す動詞は(他動詞と自動詞の)「両用動詞」と呼ばれる。両用動詞の例として、*abrir, aumentar, bajar, cambiar, cerrar, disminuir, empezar, explotar, quebrar, subir*などが挙げられる。

このように、両用動詞の他動詞用法と自動詞用法の意味構造を考えるならば、次の図式の、

- (2) a. Juan (主語) + abre (他動詞) + la puerta (目的語).
b. La puerta (主語) + abre (自動詞).
c. Juan (主語) corre (自動詞).
a'. Juan < 行為者 > + abre < 動作 > + la puerta < 対象 > .
b'. La puerta < 対象 > + abre < 動作 > .
c'. Juan < 行為者 > corre < 動作 > .

(2a,b)というような従来型の分析(統語構造)だけでは不十分である。むしろ、(2a',b')のように、同じ *la puerta* を「対象」(OBJETIVO)²として関係づける方式のほうが意味構造をよりよく反映していることがわかる。ここで、後者(2b')に「行為者」(AGENTE)が存在しないことに注目したい。自動詞の *abrir* には

¹ この論文は第18回「スペイン語学セミナー」(SELE:1998/8/27)で行った口頭発表に基づいている。有益なコメントをいただいた参加者の方々、とくに長い議論の相手をしていただいた出口厚実先生、草稿に対して的確な批評や情報をいただいた福嶋教隆先生、高垣敏博先生、アントニオ・ティノコ先生、佐藤邦彦先生、大森洋子先生に謝意を表します。

² OBJETIVO は意味構造上の概念なので、統語構造の「目的語」(objeto)の概念とは異なる。

行為者は現れず、「開く」という動作は *la puerta* という対象が自動的に引き起こす動作を示している³。(2a')については特に解釈上の問題はないと思われるが、(2b')は少し説明が必要だろう。確かに、*La puerta abre* という文の意味だけを直感するならば「対象」という意味を感じとることは難しい。それは *la puerta* が統語上の主語となっていることに起因する直感である。意味構造の中で主語に「対象」として位置づけられる *la puerta* が統語上主語になることによって、「自動性」を獲得したと考えられる。

参考までに、〈行為者〉がそのまま主語になるケースを挙げておく(2c,c')。この場合、*Juan* は〈動作〉の対象ではなくて、その〈行為者〉そのものを指す。このように、意味的なく対象〉を統語的な主語にとる動詞は「非対格自動詞」、それに対して〈行為者〉を主語にとる動詞は「非能格自動詞」に分類される(cf.影山, 1996:21)。

さて、スペイン語には *John opens the door* と *The door opens* に対応する *Juan abre la puerta* と *La puerta abre* の他に、再帰文と呼ばれる *Se abre la puerta* という高頻度の統語構造がある。実は、他動詞構文に意味的に正確に対応するのは両用動詞による自動詞文ではなくて、以下の議論の焦点となる再帰文なのである。これは、再帰接語をつけた自動詞用法が可能な他動詞のすべてに自動詞用法があるわけではなく、むしろ自動・他動両用動詞のほうが珍しいという事実の他に、両用動詞の自動詞用法には「動詞が意味する変化・動作が主語の事物の内在的特性を誘因として実現する」(佐藤 1996:50)という特性がある。たとえば、*Esta puerta abre bien* は、ドアの特性の記述であって、具体的なアクションと見なされる他動詞用法や再帰用法とは異なる⁴。このような自動詞の内在的特性は何に由来するのだろうか。

論証の前に結論を先に述べるならば、他動詞文、自動詞文、そして再帰文のそれぞれの意味構造を次のように仮定する。

- (3) a. *Juan abre la puerta.*
 a'. 〈行為者:JUAN〉ABRIR〈対象:PUERTA〉
 b. *La puerta abre.*
 b'. ABRIR〈対象:PUERTA〉
 c. *Se abre la puerta.*
 c'. 〈行為者:X〉ABRIR〈対象:PUERTA〉

自動詞文(3b)と再帰文(3c)がとくに異なる点は意味構造における〈行為者:X〉の存在(3c')である。たしかに表面的(統語的)には(3c)の *la puerta* は主語であるが、意味構造は〈X〉 ABRE *la puerta* という図式になる。一方、*La puerta abre bien* という自動詞文では *la puerta* が自動的動作者となっているので、動詞に前置して積極的な主語となる。

本来顕示的ではない意味構造を上のように設定することは多分に抽象的・思弁的な作業である。とくに再帰文における〈行為者:X〉という存在については、それを立証する何らかの具体的な根拠

³ 中右(1994)の「自動的動作主」にあたる。

⁴ 佐藤(同:49)の挙げている例(a)は具体的な過去の動作を示している。ところが、同じ過去形であっても(b)の自動詞文は適格文である。

a. *Esperaba a que alguien saliera... La puerta [*abrió / se abrió], pero no salió nadie.*

b. *La puerta de mi casa abría mal, pero ayer cuando llegué a casa, (la puerta) [abrió / ?se abrió] bien.*

アントニオ・ルイズ・ティノコ氏(談)によれば、これは(...)Experimenté que la puerta abría bien.のようなニュアンスとなるそうである。よって、(b)も自動詞の「内在的特性記述」の反例とはならない。

が必要であろう。筆者は、先に挙げた再帰構造の基本的な諸問題が、後述のように、この<行為者: X>という補助線を使えば解決されることを述べてその存在の論証に代えたいと思う。

2. 自動詞化

他動詞は再帰代名詞を付加するとどうして自動化するのだろうか。これは再帰構文の本質的な問題である。ここで他動詞に再帰代名詞が付加して自動化する、というプロセスよりも、本来再帰構文が存在していて、それが自動詞構文と類似した振る舞いを示すと考えたほうがよいだろう。そうでなければ、*arrepentirse*, *jactarse*, *quejarse* などの再帰専用動詞の説明ができない。これらの再帰動詞が派生によって生じるとすると、現実に存在しない動詞**arrepentir*(4a)や**jactar*(4b)を想定しなくてはならなくなる。

- (4) a. **La mentira me arrepiente.*
b. **La victoria te jacta.*

そして、再帰構造がそれと対応する自動詞構造と類似するのは、両者とも他動詞の目的語に相当する要素が、意味構造において<対象>として存在しているからである⁵。

- (5) a. *La puerta abre.*
a'. *ABRIR*<対象:PUERTA>
b. *Se abre la puerta.*
b'. <行為者:X>*ABRIR*<対象:PUERTA>

再帰文 *Se abre la puerta* と自動詞文 *La puerta abre* を比較することによって再帰文の以下の特徴を検討しよう。

- (6) a. 語順: 自動詞文では主語は前置され、再帰文の主語は(他に条件がなければ)後置されるのが普通である。
b. 意味: 自動詞文では自発的な動作を示すが、再帰文では外在的な行為者が考えられる。

2. 1 語順

はじめに語順について見よう。一般に(情報的に中立の文で)自動詞では他動詞構文と同じように主語が前置する。情報的に中立な文とはたとえば、*Qué pasó?*に対する答えなどが考えられる。

- (7) a. *Qué pasó?* - *Juan rompió mi bicicleta.* (他動詞構造)
b. *Qué pasó?* - *Esta puerta no abre bien.* (自動詞構造)

これに対して、再帰構造ではどうだろうか？次は Richard(1966:51)の練習問題である。

- (8) a. Using the words in parenthesis, answer the following questions according to the examples.

⁵ 自動詞と再帰動詞の主語と他動詞の目的語が意味的に同じ<対象>として同定されるのは、たとえば次のような選択制限のあり方が証拠となる。

- a. [*La puerta* / **La mesa*] abre.
b. Se abre [*la puerta* / **la mesa*].
c. Juan abre [*la puerta* / **la mesa*].

すなわち、*ABRIR* に対して同じ意味的な関係があるために同じ意味的な制限が加わると考えられる。仮に統語的な主語と目的語という基準だけを考えると、それぞれ主語と目的語の(本来ならば同一であるはずの)選択制限を別々に設定しなければならなくなる。

b. Examples: 1. (cerrar / puerta) Qué pasó?

c. - Se cerró la puerta.

このように主語が後置されている。さらに次の例文を比較しよう。

- (9) a. La puerta abre a las diez.
b. [?]Abre la puerta [SUJETO] a las diez.
c. La puerta se abre a las diez
d. Se abre la puerta a las diez.

一般に自動詞文では主語は動詞に前置する(9a)。もし(9b)のように後置させると *la puerta* を主語とする自動詞の解釈は不自然である(他に三人称単数の主語があるか、または命令文のようにも解釈できる文になる)。つまり、*la puerta* は *Abre* の目的語のふつうの位置になるので、(9b)よりも(9a)の方が好まれる。もちろん、*A las diez abre la puerta* のように副詞句が先行し、(かつ・または) *la puerta* が新情報ならば主語後置も不可能ではないが、このような特殊な条件がない限り、(9a)とするほうが自然である。ところが再帰形では動詞の後でもとくに不自然ではない(9d)⁶。このような語順の差は何に起因するのだろうか。

この解答は先に挙げた意味構造の違いに求めることができる。すなわち、自動詞文(9a)では<対象>がそのまま主語となるので、主語の本来の位置である動詞前位置におさまるが、一方再帰文では、確かに同じように<対象>が主語化されているのだが、<行為者:X>が前景にあるとき、つまり「受身」解釈を許すときはそれが消えず、主語の前にゼロ要素として存在している(9d)。

それでは(9c)の語順はどう説明されるのであろうか。これは、「自発」の意味には主語前置が適合するためだと思われる。Babcock(前掲書:33,n3)は、次のように両者を英語と対応させている。

- (10) a. Se abre la puerta a las diez.
a'. The door gets opened at ten.
b. La puerta se abre a las diez.
b'. The door opens at ten.

つまり主語後置(10a)が受身に近く、主語前置(10b)が自動詞に近い⁷。また、次のペアも興味深い(同書:56)。

- (11) a. Se ven las montañas desde aquí.
a'. The mountains can be seen from here.
b. Las montañas se ven desde aquí.
b'. The mountains are visible from here.

ここで著者は次のような非常に重要な観察を行っている。Sentence (1=11a) assumes a **potential viewer**. Sentence (2=11b), on the other hand, focuses on the visibility of the mountains, **independently of whether anyone sees them or not**. (太字は筆者)

ここでは、再帰構文における主語前置が(自動詞に類似した)自律的な意味(「自発」)となる、という指摘に留めたい。この問題は3でさらに検討する。以下では再帰「受身」文では主語を動詞に後置さ

⁶ Fukushima(1984)によれば、What happened to the house?という疑問文には、La casa fue construida という答えが対応し、What happened? に対しては Se construyó la casa が対応するという。ここで、いわゆるSER受動文とSE受動文の主語の位置が異なることに注目したい。

⁷ cf. García (1975:22), 寺崎(1982:347).

せ、「自発」の再帰文では前置させて示すことにする。これらの位置は様々な統語的・情動的条件によって変化するが、それぞれの典型的な位置であるので、説明を明確にするためにこの位置に固定しておく。

2. 2 意味

La puerta abre も Se abre la puerta も説明のために単純化した文であって、実際にはこのような文は演劇作品のト書きのような純粹に事象を記述した文に限られる。むしろ自然なのは次のような例文であろう(佐藤 1996)。

- (12) a. Esta puerta no [abre / *se abre] bien.
b. La puerta [*abre / se abre] con la llave.

(12a)では再帰動詞よりも自動詞のほうが自然である。逆に(12b)では自動詞よりも再帰動詞が好まれる。この用法の違いはどのような意味の違いによるものだろうか。さらに次の例文を比べてみよう。前者はきわめて自然であるが後者は非文となる⁸。

- (13) a. Se abre la puerta para los clientes.
b. *La puerta abre para los clientes.

先行研究によれば、このような再帰文には音形には現れないものの外在する行為者が想定されるという(Goldin 1968, Langacker 1970, 出口 1973, Manteca Alonso 1976, 高垣 1981, 佐藤 1996 など)。この観察は正しいと思われる。これを<行為者:X>と呼ぶことにしよう。

一方自動詞文について、Babcock(1970:44)は、La puerta abre bien 'The door opens well'という文を、"the verb is completely disengaged from the hypothetical subject"と観察している。

佐藤(1996)は先の(12a,b)の文法解釈を「外的な作用因」(すなわち本稿の<行為者:X>)の有無によって正しく説明している。<X>という用語について付言するならば、これは<行為者>が「存在しない」ということではなくて⁹、「見えないXとして存在する」という意味である。同じ意味構造に照らして、意味の差に起因すると思われる先の最小対(12a,b)の比較を検討しよう。再帰文では<行為者:X>が主語となる。佐藤(同:60)は、「La puerta cierra bien では<作用因>は想定されず、La puerta se cerró では外的なく作用因>が想定される」と述べているが、この観察は正しいだろう。ここで外的なく作用因>(=<行為者:X>)を想定することで、(12b)では con la llave はXが使用する道具を示すが、<行為者:X>のない自動詞文(*La puerta abre con la llave)ではこの llave が誰が使用するものかわからなくなる。もともとドアが自然に開く事態を表現している自動詞文では con la llave という付加詞と適合しない。また、(13ab)の文法性の違いは、para los clientes が外在的な行為者(「彼ら」や「店主」など)の意図を示すことから説明される。

⁸ Gili Gaya (1961:77)は、divulgarse la noticia という命題について con mala intención が不定の主語に言及し、con gran rapidez は受身の主語に言及する、という。よって、主語の位置との関連を示せば、次のような文法性判断になるだろう。

a. Se ha divulgado la noticia [con mala intención / (?)con gran rapidez].

b. La noticia se ha divulgado [(?)con mala intención /con gran rapidez].

すなわち、主語後置であれば意味構造に<行為者:X>が想定されるので、con mala intención は<行為者:X>に言及し(a)、一方、主語前置であれば con gran rapidez は主語に言及する(b)。

⁹ 自動詞文では<行為者:X>存在しない。

以上が序に設定した問題-1の解答である。先に掲げた語順問題と意味問題も、意味構造に<行為者:X>を仮定することで解決できる。

ところが、一見これに反すると見えるようなデータが存在する(宮城昇他『和西辞典』白水社,s.v.「ひとりでに」)。

- (14) a. La ventana se abrió por sí sola.
b. El fuego se apagó por sí solo.

これらは再帰文なので<行為者:X>が想定されるはずなのに、意味は「窓はひとりでに開いた」や「火はひとりでに消えた」である。石崎(1991:20)も *Juan abre la puerta* は「主語が自分の意志で行為を行うのに対して、(*La puerta se abre* は)ひとりでに(自然に)起こる」と解釈している。この構文は主語が積極的に働く「自律的」再帰構文であり、本節で取り上げてきた再帰構文とは異なるもので、詳しくは次の3. 1で扱う。

これまで、「自発」の再帰構文と比較するために自動詞文を取り上げてきたが、*abrir* のような両用動詞(自動詞と他動詞が共に使われる動詞)は他動詞専用動詞と比べて、むしろ少ない。よって、自動詞構文:他動詞構文:再帰構文という3種の比較する枠組みは一般性に欠ける。以下ではより一般的な他動詞専用動詞、そしてその再帰構文について扱うことにする。

3. 再帰構文

3. 1 自律再帰構文

三好(1995:383-4)は「他動詞の自動詞化」を次のように説明している。はじめに、*María se peina* などの「再帰用法」と区別するために、*a sí mismo* によるチェックを行う。

- (15) a. *Me lavé a mí mismo.* ... A
b. **Me senté a mí mismo.* ... B

よって、この場合の *lavarse* は「A:再帰用法」、*sentarse* は「B:自動詞化」用法となる。さて、その「B:自動詞化」を主語に注目して次のように分類する。重要な指摘なので以下に引用しよう(一部省略)。

B1)人間が主語で、動作の主体は主語:その行為が主語の意志だけで実現されるとは考えにくいとき。用法は全人称におよぶ。受身の意味は感じられない。

- a. *Juan se levanta todas las mañanas a las seis.*

(フアンは毎朝6時に起きる)

- b. *Con todo nos hemos hundido en la pobreza.*

(しかしながら私たちは貧乏の淵に沈み込んだ)

B2)人間が主語で、動作の主体は主語以外:主語が何かの出来事の経験者。その行為の遂行のためには主語の意志が働いている。受身の意味が暗に含まれる。主語は全人称におよぶ。動詞は限られている。

- a. *El próximo lunes los alumnos han de examinarse.*

(次の月曜日、生徒たちは試験がある)

B3)人間以外のものが主語:主語は3人称のみ。意味的には、行為者として主語以外のものが考えられる。構文的には、再帰動詞が自動詞であると解釈される。

- a. *El agua se evapora.* (水が蒸発する)

- b. *Se rompieron los cristales.* (窓ガラスが割れた)
- c. *La gripe se ha curado sola.* (風邪がひとりでに治った)
- d. *La puerta se abrió con un empujón.* (ドアが一押しで開いた)
- e. *Con el aire se apagó la vela.* (風でろうそくが消えた)

主語と動作の主体による分類という観点はとくに重要だと思われる。主語は統語構造の単位、動作の主体は意味構造の単位である。筆者も両者を共に俎上に載せることに賛成である。この点を踏まえて、ここでは別の視点からの分類を提案したい。

はじめに、そもそもの「再帰用法(A)」と「自動詞化(B)」という分類について考えてみよう。ここ(三好1995)で、「再帰用法(A)」の「再帰」とは統語構造の「再帰」ではなく(だけではなく)、意味構造の「再帰」を指すことは明らかであろう。もし統語構造の再帰だけのことを言っているのであれば、(再帰動詞の)自動詞化用法にも当てはまるので分類の基準にはならない。一方、「自動詞化(B)」というのは統語構造の問題である。よって、同じ基準(意味・用法)で(統語的)再帰構造を分類するとすれば、それは「自動詞化(B)」というよりも「自発」(*espontáneo*) という別の意味・用法の基準が考えられるだろう。

「自発性」に対して「意図性」(*intencional*)という概念がある。中右(1994:425)は「意図」を「みずからそうする」という意味で説明している。一方、「自発」は「おのずとそうなる」(同:427)という意味である¹⁰。さて、三好(1995)の記述に見られる「意志」は、ここでいう「意図」とは異なるだろう。(B1)は三好によれば「主語の意志だけで実現されるとは考えにくい」¹¹が、「意図」という観点を採るならば主語の意図による動作だと考えられる。そうすると、主語に意図性があるのは実は大分類の「再帰」用法と同じだということがわかる。大分類のAとBは*a sí mismo*のテストで区別されるが(15a,b)¹²、(15a)の主語の意図という観点から見ると、どちらも同じように意図性が認められる¹³。この場合(AとB1)には<行為者: X>は想定されない。

(B2)について問題にしたい点は次の3つの指摘である。

- (16) a. 遂行のためには主語の意志が働いている。

¹⁰ 中右(1995)では、この他に「自動」という概念も説明されている。そして三者は動作主に関わる概念である。

¹¹ この点は非常に難解な部分である。はたしてここで主語の意志以外に何(誰)の意志があるのだろうか。筆者は*Juan se levanta...*の動作は主語の意志だけで実現すると考える。

¹² *a sí mismo*によるテストは万能ではない。たとえば、「A:再帰用法」に掲げられている次の例でテストしてみよう。

- a. *Javier se lava (a sí mismo) después del trabajo.*
- b. *María se arregla (a sí misma) el peinado.*
- c. *Juan se cortó (?a sí mismo) el dedo.*
- d. *María se quemó (?a sí misma) la mejilla.*

(a,b)に比べて(c,d)では使いにくい。もし使うと「(うっかり)指を切ってしまった」または「頬をやけどした」というよりも、「(意図的に)指を切った」や「頬に火をつけた」のような意味になるだろう。これは'se'が間接目的語*a sí mismo*に働きかける「関与性」の与格となるからである。cf.上田(1998)。

¹³ 同じ「再帰用法」に属する文でも意図性がある文(a)と、意図性がない文(b)がある。

- a. *María se lava las manos.*
- b. *Juan se cortó el dedo.* (cf.前注)

しかし、後述するように両者は共に「自律的」再帰構造として同じ分類に属する。

- b. 受身の意味が暗に含まれる.
- c. 主語は全人称におよぶ.

すべて基本的に正しい指摘なのだが、ここではもう少し掘り下げて考えてみたい。もし、三好の主張による「意志」ではなく「意図」という観点を採用するならば、指摘(16a)は人称によって異なることになる。たとえば *Me examinaré* では主語の意図が働いているが、*Los coches se examinarán* ならば主語(*los coches*)に意図はない¹⁴。そして、先の *Los alumnos han de examinarse* には意図と無意図の二通りの解釈がある(cf. Martín, 1979: 123)。意味構造で示せば、次の(17a,b)の解釈の違いがある(この問題については4. 2で詳しく扱う)。

- (17) a. <行為者:ALUMNOS>EXAMINAR<対象:ALUMNOS>¹⁵
 b. <行為者:X>EXAMINAR<対象:ALUMNOS>

第二の指摘(16b)も場合によって異なる。たしかに *Me examinaré* でも *Los alumnos se examinarán* でも受身の意味が暗に含まれている。暗に *examinar* する主体が隠れているように感じられる。ここでは、その「受身性」のあり方をさらに検討してみたい。次の文を比較しよう。(18a)に感じられる受身性は(18bc)ほど強くなく、むしろ(18a)では受身というよりも主語は積極的に動作を起こしていると考えられる。

- (18) a. *Me examinaré detenidamente para ver cómo está el corazón.*
 b. *El coche se examinará detenidamente para ver cómo está el motor.*
 c. *El paciente se examinará detenidamente para ver cómo está el corazón.*

その証拠として、(18a)の *detenidamente* は主語(YO)の動作を描写しているが、(18b,c)では主語(*el coche*, *el paciente*)ではなくて、誰か別の人間(自動車整備工や医者)の動作を描写していると解釈される。そこで、(18a)は主語の積極的な行為を示していて、受身の意味は(18b,c)にこそ含まれると記述した方がわかりやすい。

また、*para ver* 以下の「目的」を示す副詞句は、基本的に主語指向のものである。そこで(18a)ならば容易に *ver* の意味上の主語が YO と結びつくが、(18b)では表面的な主語(*el coche*)と結ばれず、外部の<行為者:X>と結ばれる¹⁶。主語が人間の(18c)であっても、外部の<行為者:X>として医者などが想定され、それが *ver* の意味上の主語となる。

¹⁴ 三好(1995)は「人間が主語」の場合を扱っているので、これはその反例にはならない。よってこれは比較のための参考資料にすぎない。

¹⁵ これは表面的な統語構造と直接結びつく(変形によって導出される)意味構造ではない。

- a. *Los alumnos examinan a los alumnos.*
- b. *Los alumnos se examinan.*
- c. *Quiénes examinan a los alumnos?*
- d. *Quiénes se examinan?*

(a)から再帰化変形を経て(b)になるとは考えられないからである。前者を表面的に解釈すれば、主語の *Los alumnos* と目的語の *los alumnos* が異なる点で(b)とは異なるし、また(a)、(b)はそれぞれ疑問文の(c)、(d)の答えであって、両者は明確に区別される。

¹⁶ 実はこの文法性判断は微妙である。「目的」の *para* + 不定詞の(意味上の)主語解釈を論じた Morales(1989)によれば、目的語の不定詞句(b)などと比べて、*para* 不定詞句の同一主語の条件は緩い(a)。

- a. *Mi papá me dio aquella casita para irme allí.*
- b. cf. *Mi papá ha venido a verte.*

上の(a)の不定詞 *irme* の主語は主文の与格の *me* であるが、(b)では主語の *Mi papá* となる。よって、本文

さて、問題の *Los alumnos han de examinarse* には先にも述べたように両義性があり、先の意味構造 (17a)に該当する解釈では受身性はなく、(17b)に該当する解釈では受身性が暗に含まれることになる¹⁷。

最後の人称に関する指摘(16c)は言語事実としては正しく、また学習者にもわかりやすいが、以上の議論を踏まえるならば受身の意味を暗に含む自動(詞)化は三人称に限るとしたほうがよいだろう。繰り返すが、一二人称の自動(詞)化には受身の意味は(三人称と同じレベルでの受身ということでは)感知されない。

最後に三好(1995)の分類(B3)について考えよう。ここはとくに重要な点である。三好によれば(B3a)の例文には「行為者として主語以外のもの」が考えられる。確かに、「受身」的な意味であれば<行為者:X>が存在するが、「自発」的な意味であれば<行為者:X>は存在しない。そこで、筆者は *El agua se evapora* には受身と自発の両義性があると考え。それぞれ<行為者:X>EVAPORAR<対象:AGUA>という意味構造と<行為者:AGUA>EVAPORAR<対象:AGUA>という意味構造に対応する。この事情を明らかにするために次の例文を比較しよう。

- (19) a. [Con / Por] el calor el agua se evapora.
b. [Con / ??Por] el calor el agua se evapora por sí sola.

(19a)は「自発」と「受身」の意味があり、「自発」ならば「随伴」の con+名詞(≠<行為者:X>)、「受身」ならば<行為者:X>に相応する por+名詞を用いる。このままでは単なる解釈に過ぎないが、その証明として、(19b)を挙げよう。por sí sola は唯一「自発」の意味で使われるので(19b)には(19a)のような両義性はない。よって前置詞も con が選ばれるのである。

このように por sí solo [sola]は「自発」の意味を喚起する(20a)。それに対して por sí mismo は「意図」の意味を喚起する(20b)。

- (20) a. El telón se levanta por sí sola.
b. Juan se levanta por sí mismo.

しかし、どちらも主語の主體的な動作に対応することには変わりはない。そこで、これらの構造を「自律再帰構文」(construcción reflexiva autónoma)と呼ぶことにしよう。これに対して<行為者:X>が想定される構造を「他律再帰構文」(construcción reflexiva heterónoma)と呼ぶ。以下では他律再帰構文の特徴を見る。

3. 2 他律再帰構文

なぜ他律再帰構文は三人称に限られるのであろうか。この問題は「<行為者:X>動作<対象>」という他律再帰構文の意味構造によって説明される。つまり、意味構造において他動詞文の目的語に相当する<対象>が統語構造において主語となっているからである。<対象>が三人称の対象物なので、それが主語化しても三人称でなければならないのである。

中(18b)の para ver...を不適とする文法性判断もありうる。その場合は、不定詞の主語が主文の主語(el coche)と一致したためだと考えられる。

¹⁷ 一般に、再帰構文の受身用法は主語が人間の場合は用いられないと説明されている(西川:543)。しかし、Shroten(1972:14)は *Se buscan criados* の例を挙げている。これは、確かに *Juan busca criados* のように 'undetermined animate direct object' を指しているが、むしろ、(18c)のような例もあるから、「主語に積極的な意図がないとき」という条件にすべきであろう。

従来「自動詞化」の再帰構文には「自発」,「受身」,「不定」の意味があると説明されてきた。「自発」用法については3. 1で見たとおりである。ここでは後二者の用法について考察する。「受身」解釈については、次の点で問題がある。

- (21) a. 受身文ならば、何故三人称にだけしか用いられないのか。Yo, estando enfermo, me lavo todas las mañanas.が(概念的そして語用論的には無理がない設定であるにも関わらず)*「私は病気なので、毎日洗われる(体を洗ってもらう)」という意味にならないのは何故か。
b. 受身文の主語ならば動詞の前に置かれるほうが自然なのに、なぜ後置されるのか。
c. 受身文ならば行為者を付加することができるはずだが、これに大きな制限があるのは何故か: Todas las mañanas, la puerta se abre *por el bedel.

このように Se abre la puerta を受身文と解釈するには(少なくとも、一般に認識されている受身文と同じように解釈するには)、問題点が多い。

はじめに「受身」用法が三人称に限られるのは、先述のように、問題の再帰構文の<対象>が主語化したのであって、意味構造のレベルでは三人称の対象物であるという理由による。ここで問題になるのは、果たして<対象>が三人称に限られるか、ということである。仮に<行為者:X> DESPERTAR<対象:YO>という意味構造を想定すると、「私は目を覚まされた」という意味で Me despierto という文が想定されるかもしれない。しかし、これは二重の意味で考えられない事態である。一つは<行為者:X>は統語的に三人称と合致するはずであるのに、ここでは一人称単数となっている。また、Me despierto というのは主語がYOであることから、自律的な構文のパタンである(<行為者:YO>)。よって、一人称や二人称のように意図的な動作をする主語では受身的再帰文の主語にはならないと言える¹⁸。

Se levanta el telón では意味構造において<行為者:X>が想定され、el telón はその行為の<対象>となるので、El actor se levanta と Se levanta el telón にはそれぞれの主語の積極性・消極性の違いが見られる。

- (22) a. Se levantó el telón y el actor se levantó también.
a'. ?Se levantó el telón y el actor lo hizo también.
a". *Se levantó el actor y lo hizo el telón también.
b. Se levantó la sesión y el Presidente se levantó también.
b'. ?Se levantó la sesión y el Presidente lo hizo también.
b". *Se levantó el Presidente y lo hizo la sesión también.

このように、意味構造の方向性が相異なる2つの文を等位構造で結ぶのは難しい(22a',b)。また、"hacerlo"の構造は一般に行為者の積極的な行為を示すので、受身の意味を含む再帰文では使えない(22a",b")。

そこで、Juan se levanta と Se levanta el telón の意味構造はそれぞれ次のようになるだろう。

¹⁸ <行為者:X>VERBO<対象:YO>の例としては、次の(a, b)が考えられる。

a. Me cortaron el pelo (sin permitirlo yo).

b. Me corté el pelo (*sin permitirlo yo).

(a)ならば<行為者:X>の勝手な行動なので sin permitirlo yo という状況補語が付加されるだろうが、(b)では不可能である。これは(b)が、やはり(髪を切るというのが自分でないという点で積極的な行為を示していないにしても)<行為者:YO>を含むからだと解釈できる。

- (23) a. Juan se levanta.
 a'. <行為者:JUAN>LEVANTAR<対象:JUAN>
 b. Se levanta el telón.
 b'.<行為者:X>LEVANTAR<対象:TELÓN>

前者(23a)には Juan という行為者が積極的に働いているが、後者(23b)にはその行為者(X)が見えない。よって、Juan と el telón はどちらも表面的には文の主語であるが、それぞれ意味構造において占める位置が異なっている。(23a)の Juan は意図的な行為者であるから、Juan se levanta は(Yo) Me levanto, (Tú) Te levantas,...の全人称のパラダイムの一環であり、自ら積極的に動作を引き起こすパターンである。一方、el telón は決して(23a')の Juan の位置<行為者>に立っていない。人間ではなくまた生物ですらない el telón には意図をもって動作を積極的に引き起こす力はないのである。よって、(23a)Se levanta el telón の主語は<対象>にある被動作主、つまり三人称に限られる。

また、<行為者:X>を想定することにより、受身の主語が動詞に後置される傾向が説明できる。受身の主語は本来動詞にとって<対象>なので、動詞の後の位置が適当なのである。そして、<対象>が主語化することによって動詞に前置されると、先の「自発」的な意味(3.1)に傾斜するからである(23b)。

さらに、por+「行為者」が付加できない理由については次のように説明される。SER 受身文では por+「行為者」を付加することができる。しかし再帰受身文では次のように行為者を付加することがむずかしい¹⁹。

- (24) a. La puerta fue abierta por Juan.
 b. *Se abrió la puerta por Juan.

この理由も先の意味構造によって説明される。すなわち、(24b)においては「行為者」の位置は<行為者:X>によって占められているので、同じ意味役割を別の形式(por Juan)で表すことができないからである。

意味的にも、SER 受身では主語と受身動詞が結合して「行為者受身」(agentive passive)を形成するのに対し、再帰受身では「主語に働きかける進行中の動作」(activity in process, action being carried on and affecting the subject; Babcock:43)を示すという大きな違いがある。

次は柴谷(1997:25)の観察である。

- (25) a. Esos problemas se resuelven por autoridades competentes.
 b. ??Esos problemas se resolvieron por autoridades competentes.
 c. *Esos problemas se resolvieron por Juan.

柴谷はスペイン語の se 受身は「どの時制においても、またどのような動作主でも表現できるわけではなく、同言語における be 動詞を使った受身や、英語や日本語の受身に比べ、まだ受身としての成熟度が十分でない」と述べている。筆者の図式によれば、これらの文法性判断は<行為者:X>の存在によって説明される。(25a)は不定の<行為者:X>が autoridades competentes という「手段」によって esos problemas を resolver するという図式で解釈できる。ところが、点過去となった(25b)では具体性が

¹⁹ 先述のように por el viento のような「原因」ならば可能である。西川(1995:543)によれば、まれに<POR+動作主>が再帰受動文に表現されることがある:たとえば、Se publicó esta novela **por una editorial española**.筆者はこの文は<行為者:X>が「スペインのある出版社」を通して(por)出版したことを示すのであって、「出版社」が積極的に(自発的に)行った行為ではないと考える。

増して、〈行為者:X〉を概念化することが困難となる。さらに(25c)では *por Juan* が「手段」ではなく確実に「行為者」の解釈となるので、〈行為者:X〉と意味役割を奪い合い、非文になる。よって、筆者の枠組みからは、柴谷の言うように *por autoridades*(25ab)も *por Juan*(25c)もどちらも「動作主」であるという見方は取れない。前者が「手段」、後者が「行為者」で、この違いが先の文法性の違いを引き起こしているのである。

このように再帰構文で主語が意味構造の〈対象〉に位置する限り、〈行為者:X〉が前提とされる。それでは、先に挙げた *La ventana se abrió por sí sola* にもやはり〈行為者:X〉が想定されるのだろうか。この場合、次のように主語指向の副詞や *para* による目的句をつけられない。

- (26) a. *La ventana se abrió por sí solo.*
a'. **La ventana se abrió con cuidado para ver el paisaje del mar.*
b. *El heno se encendió por sí solo.*
b'. **El heno se encendió deliberadamente / para asustar a la madre.* (Luján 1979:107)

よって、このような再帰構文の意味構造の〈行為者〉はXではなくて、それぞれ *la ventana* と *el heno* であると想定できる。このように、音形となって現れている具体的な行為者を〈行為者:R〉(AGENTE referencial)と示すことにしよう。それが主語になると *con cuidado* や *deliberadamente* などの副詞[句]や *para*+不定詞句の意味上の主語と適合しないので不適格文になるのである(仮に〈行為者:X〉があれば、(26a',b')は(18b)と同じように適格文となるはずである)。この場合 *la ventana* や *el heno* は自発的な行為の主体となり、意味構造においても然るべく〈行為者〉の位置を占めていると考えられる²⁰。

4. 再帰構造の同一性問題

4. 1 形態論

これまでの考察の中心は三人称再帰構文であった。そこで用いられる再帰代名詞の'*se*'は全人称再帰構文(*Juan se levanta* など)でも用いられる。以下、簡単に両者の関係について考えてみたい。

たとえば、*Yo me levanto temprano* の意味構造は、〈行為者:YO〉 LEVANTAR〈対象:YO〉であるから、統語構造において〈対象:YO〉は主語の *Yo* と一致して *me* となるのは当然である。また、意味解釈も「私(*Yo*)」の意図性を考えれば無理がない解釈である。「私が私を起こす」(他動:対格)と「私は起きる」(非対格)の間に論理的な矛盾はない。つまり、主語(*Yo*)から見れば意図性を示しているし、目的語(*me*)から見れば、「(動作を受けて)起床する」のであるから、それぞれの要素が全体の意味の構成に関わっている。再帰接語の *me* にも具体的な指示性がある。*Me lavo* という「直接再帰構文」と比較すれば、なるほど *a mí mismo* の付加の可能性に違いはあるが、これは後者がプロトタイプ、前者が派生タイプと見なしてもよいだろう。

ところが、*Se abre la puerta* の *puerta* には他者に働きかける力がないので²¹、*puerta* 自身が自分に働きかけて、その結果「自分が開く」という事象は論理的に考えられない。再帰接語の'*se*'は形式的であって、具体的な指示性がない。「ドアが開く」(再帰形)のは、ドアが自発的に自分に働きかけて開くの

²⁰ もちろん〈対象〉にも位置している。

²¹ 「開く」というだけの自発性はある(cf. *La puerta abre*)。しかし他者に働きかける自発性(使役性)はない。

ではなく、外在するXの働きかけによるものである。このように両者の再帰構文は形式的にも、意味的にも大きく異なる。

- (27) a. (Yo) Me levanto. 全人称変化 <主語=行為者>
b. Se levanta el telón. 三人称変化 <主語=対象>

一方、両者の共通点は主語と目的語の同一指示とパラダイムの共通領域(三人称)の二点である。この共通点と、表(27)が示す相違点という矛盾は理論的にどう解決されるだろうか。

次に、対格接語と再帰接語の形態的変化(交替)に注目しよう。(27a)の主語 Yo と照応する Me は他の対格接語(te,le,...)と同じパラダイムに属している。たとえば、次のような交替を考えてみよう。

- (28) Juan [me / te / le (lo) / nos / os / les (los) / se] despierta.

ここで外部の人ではなく同一文の主語と一致したときに se が現れるのだから、se はこれらの(非再帰の)対格と同じパラダイムに属していると見てもよいだろう。もし、再帰用法の[me, te, se, nos, os, se]を別扱いすると記述に次のような無理が生じる。

- (29) a. 再帰用法の me と非再帰用法の me を同音異義による偶然的な形式の一致と見なすことになる。
b. Yo __ despierto という同じ環境で me と te では全く異なる範疇(再帰接語と対格接語)となる。

次に接語のパラダイムを見てみよう。他動詞文では、

- (30) a. [*Me, Te, Le(Lo), ...] despierto.
b. [Me, *Te, Le(Lo), ...] despiertas.
c. [Me, Te, Le(Lo), ..., *Se] despierta.

という穴の開いたパラダイムを用意することになる²²。一方再帰構文では、

- (31) a. [Me, *Te, *Lo, *Nos, *Os, *Los, *Se] despierto.
b. [*Me, Te, *Lo, *Nos, *Os, *Los, *Se] despiertas.
c. [*Me, *Te, *Lo, *Nos, *Os, *Los, Se] despierta.

という唯一接語のパラダイムを全人称に渡って用意することになる。また、me, te, nos, os は対格、与格、再帰格(?)という3者が競合し、一方、Le (Lo), Les (Los)には対格、与格だけが認められ、1・2人称と3人称のパラダイムの平行性がくずれてしまう。

このような複雑な記述は言語の正しい把握とは言えないだろう。この困難を避けるために、Me despierto を再帰文として独立させることなく、他動詞の despertar の一つの用法と見なす方法が考えられる。そして、me despierto は te despierto, le despierto, ...というパラダイムの一環として位置づける。実際には、*Nos despierto というのは語用論的に(言語外的論理矛盾により)避けられるが、(Juan) __ despierta ならば、パラダイムが完全に埋められる(28)²³。

²² *Me despierto, *Te despiertas, *Se despierta は他動詞文という想定の下での文法性判断である。もちろん再帰文ならば正しい。

²³ Bull (1965:255)は教育的な見地からこの考え方を勧めている:"There is, (...), some pedagogical deception in making the student believe that there are, for example, reflexive pronouns in Spanish. There are, to be sure, reflexive constructions, but *me* does not tell the student its function in either *me lava* or *me lavo*. In both examples *me* is direct object. What the constructions are and what each means does not depend on the pronouns but on whether the pronouns and the verb agree in person and number. (...) What

実際スペイン語話者は、**Me despierto** 型(再帰)と **Te despierto** 型(他動)を連続的に捉えているようだ。次は電気修理屋と彼を信用しない顧客(señora)との間の会話である。

(32) -Pues mire, señora, o entro y arreglo su televisión o me marcho. No es usted la única, tengo más avisos que atender.

-Pase, pase. No se ponga así.

-Señora, **yo no me pongo, me ponen**. Dónde está el aparato?²⁴

ここで、太線部は「私は(自分で)怒っているのではないですよ、私は怒らされているですよ」とでも訳せるような文である。ここで、**me pongo** の **me** と **me ponen** の **me** をそれぞれ再帰接語と対格接語のように異なるパラダイムに属するものではないだろう。管見では、どちらも同じ対格接語である。また、それがスペイン語話者の直感に近いと思う²⁵。

このようにして、仮に全人称タイプの再帰形が実は表面的な主語と目的語の一致によるもので本質的には他の他動詞構文と同じだという判断が受け入れられるとすれば、本来の再帰文は三人称専用型に限られることになる。この方法には次のような利点がある。

(33) a. 他動詞構造の同一性が保たれる。他動詞文の主語は常に<行為者>、目的語は<対象>となる²⁶。

b. 代名詞(接語)のそれぞれの同一性が保たれる。対格接語(**me, te, le, lo, la, nos, os, les, las, se**)は対格接語(または与格接語)となり、他動詞文においてパラダイムが完全になる。そこでは唯一'**se**'だけが再帰文と共用される。

c. パラディグマティックな関係。再帰接語は常に'**se**'となり²⁷、対格(や与格)のようなパラダイムが必要でなくなる。

d. シンタグマティックな関係。再帰構造が非常に単純化される。新しく認められる再帰構造は唯一「**se**+三人称」だけである²⁸。

一方、難点として次が挙げられるだろう。

(34) a. **Me despierto** の「再帰性」と **Te despierto** の「他動性」の区別がなくなる。どちらも他動詞文としてしまうと、とくに前者の意味解釈が正しく行われない。

the student needs to know is what happens linguistically when the doer and the done-to are the same and when different" 筆者は基本的にこの意見に賛成であるが、スペイン語に「(再帰構文は存在するが)再帰代名詞は存在しない」という点については、3 人称(**se**)だけは(他律)再帰代名詞としての範疇が必要だという主張(後述)をもって、留保したい。

²⁴ María Rosa Gutiérrez Benítez: *Escenas de la ciudad*. Editorial Coloquio, 1990, 7-8.

²⁵ このように再帰構文と対格構文が対比されて使われるのはよくあることである。次は筆者が耳にした歌謡の一部である。"... al dormirme sé que **me despierto** con tu amor. ... sé que **me despierta** tu calor (...)" (Inma Serrano, "Cantos de Sirena") 母国語話者は両者の構文的な違いよりも意味的な平行性を直感しているのではないだろうか。

²⁶ 一方、再帰文の主語は<対象>または<行為者:X>となり目的語はそれと一致する。

²⁷ もちろん与格接語に由来する **se** は同音異義である。例。 **Se lo doy**.

²⁸ このように **se** は他の接語(**me, te, le, etc.**)と比較して、唯一的に再帰構文でしか使われないという点で特殊である。また、他の接語は単数形と複数形を区別するのに対し、**se** はどちらも同じ形になる。 **Se levanta. Se levantan.** この点も、**se** を他の接語と区別する形態的な論拠として挙げられるだろう。

b. *Me despierto* と *Se despierta* の意味的連続性が失われる。Me...が他動詞文、Se...は再帰文と分類されてしまうのでは、両者に共通する意味構造が捉えられない。

予想される反論(34a)に対する筆者の答えは次の通りである。たしかに *Me despierto* の意味は「私が私の目を覚ます」のではなく、「私は目を覚ます」であり、一方、*Te despierto* は「私は君の目を覚ます」である。ここで両者の意味構造は次のようになるだろう。

- (35) a. *Me despierto*.
a'. <行為者:YO> DESPERTAR <対象:YO>
b. *Te despierto*.
b'. <行為者:YO> DESPERTAR <対象:TÚ>

このように両者は完全に平行していて異なるのは<対象>だけである。(35a)に感じられる「自動性」は統語構造の再帰という形式と意味構造の常識的推論による解釈であり、意味構造内では両者は同じ構造を保っていると考えられる。

二番目の予想される反論(34b)のほうがやや複雑な事情をはらんでいる。*Me despierto* を他動文、*Se despierta* を再帰文とするのでは、たしかに両者の共通性を見失ってしまう。しかし、先述のように、後者(*Se despierta*)には両義性(二つの異なる意味構造)があることに注意したい。

- (36) a. (*El niño*) *se despierta*.
a'. <行為者:NIÑO> DESPERTAR <対象:NIÑO>
b. *Se despierta* (*el niño*).
b'. <行為者:X> DESPERTAR <対象:NIÑO>

意味構造(36a)は *El niño* が自発的に(または意図的に)目を覚ます事態をとらえ、(36b')は外部的な作用因<行為者:X>によって目が覚まされる事態をとらえている。(36b')はたとえば、外で犬がほえているときなどを想像すればわかる²⁹。筆者の分析では(36a)が他動文となり(36b)が再帰文となる。そこで、(36a)の'se'は *me, te, le...*と共に他動文の対格接語のパラダイムを構成し、解釈(36b)の'se'が唯一的な再帰接語となる。

この観察から派生する新たな問題点として、同じ'se'という語形なのに一方は対格接語(*El niño se despierta*)、もう一方は再帰接語(*Se despierta el niño*)という同音異義を認めてもよいのかという点が挙げられるだろう。筆者の解答は、*se* は常に三人称の再帰接語である、という形式論上の同一性を主張することにある。これまでの議論から明らかのように、そして事実も明白なのだが、*Me despierto* において形式的な再帰的一致(*Yo=me*)がある、つまり、*Me* と *despierto* の活用が一致していることは否定しようがない。問題はこのような形式上の主格=対格の一致が、*Se despierta el niño* と意味レベルで同一視してよいのかという点である。問題点をより明確にするために、先の *levantarse* の例で考えよう。

²⁹ 自発性は次のようなテストで確認できる。たとえば下の(a)の動作は、自発的な動作(「私が目を覚ました」)であって「私は目を覚まされた」のではない。一方(b)は(自発性のない)「受身」用法である。このことは「随伴」を示す *con* と「作用因」を示す *por* の分布の違いによってわかる。

- a. *Me he despertado* [*con* / ?*por*] *el ladrido del perro*.
b. *Se ha despertado el niño* [?*con* / *por*] *el ladrido del perro*.

(37) a. **Juan se levanta.**

b. **Se levanta el telón.**

(37a)では主語と同一の<行為者:JUAN>が認められるが, (37b)では主語の *el telón* と<行為者:X>は異なる実体である. この違いが重要なのであって, 両者の *se* は形式上の一致にすぎない.

しかし, 形式上の一致にすぎないといっても, それは偶然的な一致による同形式, つまり同音異義というわけではない. 両者ともに主語に再帰的に照応する代名詞である. ここで統語上の「主語」に照応し, (意味的な)<対象>に照応するのではないことに注意したい. よって, 例文(37a,b)における '*se*' という形式の一致は意味構造ではなくて, 統語レベルにおいて主語との一致により, 同じ形式に決定されていることがわかる.

再帰代名詞 '*se*' は, 意味レベルで (3人称の) 行為者と対象が一致したとき (自律的再帰), または <行為者:X> が存在する (他律的再帰) ときに現れる機能語である.

4. 2 意味・統語論

同じ再帰代名詞がなぜ様々な意味を生むのだろうか. 周知のように, 再帰構文は *A las diez se abre la puerta* は「10時に戸が開けられる」(受身), 「10時に(人が)戸を開ける」(不定の行為者), 「10時に戸が開く」(自発)のように様々な意味となる.

そのような派生的な意味の違いが生じるのは, 三者に共通して<行為者>の後景化があるためである. <行為者>が後景に退くことは, 相対的に(消極的に)<対象>を前景化させるだろう(受身), その結果<対象>が自発的な主語となるだろう. また行為者(<行為者:X>)がないということではなくて, 存在するがそれが特定できないということが「不定人称化」ともつながるのである³⁰.

もちろん, 再帰形式はここで取り上げた意味構造に限られるわけではない. ここで詳述する余裕はないが, 意味構造と人称変化をそれぞれ弁別することによって, 他の用法もより整理された形で把握できるはずである. ここでは簡単に素描だけで済ませることにしよう³¹.

(38) a. **Te lavas las manos.**

a'. <行為者:TÚ>LAVAR<対象:MANOS><関与者:TÚ>

b. **Ellos se quieren.**

b'. <行為者:ELLOS>QUERER<対象:ELLOS>

c. **Me voy.**

c'. <行為者:YO>IR<関与者:YO>

d. **Se me rompió el reloj.**

d'. <行為者:X>ROMPER<対象:RELOJ><関与者:YO>

e. **Se respeta a los ancianos.**

e'. <行為者:X>RESPETAR<対象:ANCIANOS>

³⁰ 30. これらの意味は派生的なバリエーションなので, 「自動詞化」したといっても, これまで見てきたように, 本来の自動詞文とは大きく異なる. そして, (再帰代名詞による)「受身文」も本来の *SER* 受身文とは違う. また, よく論じられるように *se* が不定人称主語であるという解釈も次の理由から採用できない(もし *se* が主語ならば, **se te querrá* のような構造が可能となるはずである): *Si te portas bien, [te querrán / *se te querrá] más.*

³¹ 再帰代名詞には, 強調, 相互, 出発点, 完遂, 非意図性, ...など様々な意味があるが, これらはここで扱っている基本的な意味構造から派生される意味だと考える.

f. Aquí se vive bien.

f. <行為者:X>VIVIR

本稿では、主語が<行為者:R>である文(38a,b,c)を「自律的再帰文」と呼び、<行為者>がXである文(38d,e,f)を「他律的再帰文」と呼んできた。

(38a',b',c',d',e',f)は想定される意味構造であるが、これらはどのように統語構造とリンクするのであるうか。自律再帰構文(38a,b,c)については、もちろん<行為者:R>と<対象>または<関与者>がそれぞれ統語構造にマップされる主語と目的語の間の同一指示によって説明されるので問題はないだろう。

問題はむしろ<行為者:X>のある他律再帰構文(38d,e)にある。他律再帰文(38d)では、<行為者:X>と動詞の内項が意味構造において一致していない。意味構造中の<対象>は統語構造で主語化されなければならないが、そのとき意味構造においてそれが消失することなく厳然と残っていることに注意したい。その存在こそ「対象」という意味解釈を保証するし、また主語との一致という統語過程を説明するのである。もちろん、意味構造における<行為者:X>も(後景に退くことはあっても)消えることはない。

よく議論的となる(38e)については意味構造で'los ancianos'が<対象>の位置を占めることに異論はないはずである。この場合、先の(34d)とは異なって、<対象>が統語構造の主語にならないで、<行為者:X>の方が主語化している。この解釈によって前置詞'a'の出現や los による代名詞化(Se los respeta)が説明される。

最後の(38f) Se vive (bien)の<行為者:X>VIVIR という設定はわかりにくいかもしれない。しかし、<行為者:X>の存在についてはこれまでの議論を踏まえれば当然だと思われる。この構文で独立してその存在を証明する必要があるとすれば、たとえば Se trabaja para vivir という文を考えればよい。この para vivir の不定詞の意味上の主語は一般に主文の主語に一致する。主文の主語が明確な Tenemos que trabajar para vivir ならば vivir の意味上の主語は NOSOTROS となる。(38f)では trabajar の主語に<行為者:X>を想定することで vivir の主語も同様に定位されるのである。また、vive という三人称形は、('se'という主語との一致ではなく)無主語文であることから説明される。

「受身再帰」の Se levanta el telón では<対象>が主語となり、その結果<行為者:X>は後景に退くが、「不定人称」の(38e)では、<行為者:X>が主語となるので、<対象>は目的語のまま後景に居続ける。Se vive bien では<対象>ははじめから存在しない。(38e)では<対象>が ancianos だが、<行為者>はやはりXである。このように他律再帰文の共通項は意味構造における<行為者:X>の存在であり、これこそが(<行為者:X>を持つ自律再帰文と区別された)他律再帰文の本質であると考えられる。以上を図で示すと次のようになる(参考までに、再帰構文(39a,b,c)と並べて他動構文(39d)と自動構文(39e,f)を付記する。Rは Referencial の略である。下付きの i と j は指示物の異同を示す)。

(39)

	用法	行為者	対象	主語	例
a.	自発	R _i	R _i	R _i	El fuego se apaga.
b.	受身	X	R _i	R _i	Se ven las montañas.
c.	不定	X	(R) ³²	なし	Se respeta a los ancianos.

³² 不定解釈では<対象:R>があるときも(Se respeta a los ancianos)、それがなくともある(Aquí se vive

d.	他動	R _i	R _j	R _i	Juan abre la puerta
e.	非対格	なし	R _i	R _i	La puera abre.
f.	非能格	R _i	なし	R _i	Juan corre.

「自発」(39a)と「受身」(39b)の相似はよく指摘される。両者の違いは行為者が対象と一致する指示物(R_i)であるか、それともXであるかの違いである。確かに A las diez se abre la puerta という文で判断に迷うのは、主語 la puerta に自発的に開く行為とも、Xによって開けられる動作とも考えられるからである³³。先述のように主語が動詞に前置すれば自発に、後置すれば受身に傾斜するが、これも絶対的な判断の基準にはならない³⁴。

「受身」(39b)と「不定」(39c)の違いも微妙になる。不定用法の対象がなければ(Se vive bien), 唯一「不定」の解釈しか生まれないが、対象があるときはそれが主語であれば「受身」に、目的語になれば「不定」となる。両者は同じ意味構造<行為者:X> PROCESO <対象:R>をとるときもある。そのときこそ、判断が迷うのである。しかし、今度は統語構造を考えよう。ここでは受身用法では<対象>が主語となるが(40a), 不定用法では目的語の位置に留まる(40b)。

(40) a. Se venden periódicos_i en este quiosco, y se venden φ_i también en ése.

b. Se vende periódicos_i en este quiosco, y se los_i vende también en ése.

「自発」(39a)と「他動」(39d)の意味は大きく異なるが、構造的には行為者(=主語)と対象(=目的語)が同一か否かの違いとなる。

「自発」(39a)と「非対格」(39e)の意味が接近するのはどちらも<対象>が主語となるからである。両者の違いは「自発」用法において<行為者:X>と<対象>が想定されるのに対し、自動詞では<行為者:X>はない。

「非対格」(39e)と「非能格」(39f)は、主語が対象であるか、行為者であるかの違いとなる。

先にも述べたように、筆者はこの図式のうち自律再帰文(35a)を他動詞構文の一環として位置づけたい。それに対して、他律再帰文(35b)は再帰構文特有の意味構造<行為者:X>を持っている。再帰構文の各用法を自・他律性と人称の観点から整理すると次のようになる³⁵。

bien).

³³ 全(1996:120)によれば、フランス語文法ではここでいう「自発」用法は「本来の代名動詞」の下位範疇として「中立的 se」('se' neutre)と呼ばれ(a), 一方「受身」用法は「中間的 se」('se' moyen)と呼ばれる(b)。

a. La porte s'**ouvre**. Bonnet entre. (ドアが開く。ボネが入ってくる)

b. Cette porte s'**ouvre** facilement. (このドアは簡単に開く)

さて、全は(b)の「中間的代名動詞構文は、主語の属性について記述し、超時的価値を表す」と述べている。他にも La soupe aux choux **se cuit** dans la marmite. 「キャベツスープは、鍋で煮込む(ものだ)」。このような「規範的・総称的意味」は、「表面には現れていないけれど、主体が存在することを暗示している」(全:122)。強制力をもつ se の用法について正しく<行為者:X>を想定している。スペイン語の例としては、Se trabaja para vivir. (贈り物もらった子供に対して) Qué se dice?などが挙げられる。

³⁴ 三好(1995:384)は次のように説明している。「自動詞化(=「自発」:筆者)の用法は受動用法と重なってくる。しかし主語が明確である点などで、それと異なる。主語が動詞のうしろに置かれると受動の意味が意識されやすい。

i. El gato se ha escondido debajo de la cama.

(猫は寝台の下に隠された)

ii. Se ha escondido el gato debajo de la cama.

(猫は寝台の下に隠された / 猫は寝台の下に隠れた)

³⁵ 正確には、「相互」用法と「強意」用法は「再帰」用法の下位区分である。これは福嶋氏(私信:98/10/10)

(41)

	用法	自・他律	人称	例
a.	再帰	自律	全人称	Me miro.
b.	相互	自律	全人称	Los dos se quieren.
c.	強意	自律	全人称	Juan se marcha.
d.	自発	自律	3人称*	El fuego se apaga.
e.	受身	他律	3人称	Se ven las montañas.
f.	不定	他律	3人称	Se respeta a los ancianos.

ここで注目したいのは「自発」の位置である。これは主語が<R>であるという点で「再帰」、「相互」、「強意」用法と共に自律再帰文となるが、人称から見ると3人称専用なので「受身」と「不定」と同じグループになる。筆者は「自発」用法における3人称(*印)という条件は、動詞の主語選択条件によるもので、再帰構文の意味・統語構造の条件とは思わない。仮に(人格化された)ドアに話しかける子供のことを想像してみよう。彼(彼女)には次のような発話が想像できる³⁶。

(42) Mi puertita, tú nunca *te abres* bien con esta llave.

よって、*abrirse* の自発的用法は *abrir* という動詞の<対象>は人間にならない、という語用論的な制約によるものだろう。先の幼児のように、言語外的な条件を揃えてやれば意図的な「再帰」用法でも用いられる。このように「意図」と「自発」の違いは行為の性質によるものであるから、再帰構文そのものの問題ではない³⁷。そうすると(36a,b,c,d)はすべて他動詞構文の一環として位置づけられ、本来の再帰構文の特徴は<行為者:X>の存在、つまり他律性となる。

5. おわりに. 教育的見地から

従来の伝統文法やそれにもとづいた学校文法では、再帰文の意味解釈を羅列するだけに終わり、それらに関連づけることがなかった。そして、各用法には主語・目的語の選択問題(単数か複数か、全人称か三人称専用か、人か物か)を個別に対処する方法をとってきて、そのよって来たる理由については十分な説明がなかったように思われる。そのため学習者は SE を前にして、大きな戸惑いを見せているようだ。

その混乱の原因の一つとし、「再帰」ということが統語形式の問題なのか、意味構造の問題なのかを正しく識別していなかったことが挙げられる。他動詞文の全人称において主語と対格接語が一致することはありうるが、それをもって「再帰動詞」という意味的な概念を設定するのには無理がある。形式的な再帰構造はそのまま(他律再帰構文では)意味的な再帰構造にはならない。筆者は形式と意味のレベルで平行して「再帰」という概念が適用できるならば(自律的再帰構文)、それはむしろ他動詞文の統語的な構成的規則に合致しているので、なんら説明上の問題は生じないだろう。この自律再帰構文こそ、本来の「再帰構文」と呼ぶべきかも知れない。しかし、それは他の他動詞構造の一環

の指摘による。なお、「再帰」には純粋な再帰用法(*Me miro*)の他に、従来「自動詞化」と呼ばれてきた用法も含む。

³⁶ 堀田英夫氏(談)から次の例文をいただいた: *Ábrete, sésamo*.

³⁷ 逆に、自律的再帰構文でも、3人称が[-生物]でなければ使えないものもある。以下はすべて「再帰」用法とする。 *Yo me lavo. Tú te lavas. Juan se lava. *La botella se lava* (*は「再帰」用法の場合)。これは *lavar* という動作の主体が生物でなければならない、という動詞に特有の事情であって、再帰構文の問題ではない。よって、*lavarse* は本質的に全人称である。

として位置づけて説明されるだろう³⁸。一方、〈行為者:X〉を持つ他律的再帰文(三人称専用)はそれと大きく異なるので、別に「行為者が隠れた文」として説明すべきである。

自律再帰文(または他動構文の中の再帰用法)と他律再帰文(または本来の再帰構造)についてまとめると次のようになる。

(A) 自律再帰文...〈行為者:R〉, 主語の積極的な動作(意図性・自発性), 再帰接語の指示性(具体性), 全人称パラダイム(me, te, le, la, lo, nos, os, les, las, los, se), 主語の中立的な位置は動詞の前。

(B) 他律再帰文...〈行為者:X〉, 主語の消極的な動作(受身・不定人称), 再帰接語の非指示性(機能性), 唯一の再帰接語('se'), 主語の中立的な位置は動詞の後。

両者の基本的な違いは次のようになる。

他動詞構文... 〈行為者(I):主語〉VERBO〈対象(J)〉

自律再帰文... 〈行為者(I):主語〉VERBO〈対象(I):全人称範列〉

他律再帰文... 〈行為者(J):唯一のSE〉VERBO〈対象(J):主語〉

統一説と分裂説について付言するならば、筆者の立場は曖昧になる。つまり、「再帰」、「自発」、「受身」、「不定人称」という連続性は共時的にも通時的にも認められるのは確かである(出口 1983)。連続性のある一連の要素のどこに線を引くことも可能なので、分類の作業は多分に恣意的となることは否めない。一方、先に掲げた自律再帰文と他律再帰文の明白な違いを見逃すわけにはいかない。先の連続性は認めながら、通時・共時の両面で体系(パラダイム)の組み替えと構造(シンタグム)の変化が起きたことを重視すべきである。一言で言うならば、'se'という接語の形式については同一性を認め、再帰構文という面では基本的に二つに分かれるというのが筆者の意見である。

本稿では、他律再帰構文に〈行為者:X〉を仮設することによって、それが表面上は関連がないと見られる再帰構文の様々な統語的・意味的特徴を統一的に説明する補助線となることを示してきた。この結論は、形式の同一性と意味の同一性、統語構造と意味構造の相似性、パラダイムの統一性という合理的な言語記述に要求されるであろう諸原則に背馳しないものと思う。

＜参考文献＞

Babcock, Sandra. 1970. *The Syntax of Spanish reflexive verbs. The parameters of the middle voice.* The Hague: Mouton.

Bull, William E. 1965. *Spanish for teachers. Applied linguistics.* New York: Ronald Press.

Burzio, L. 1986. *Italian syntax. A government-binding approach.* Dordrecht. Reidel.

Fukushima, Noritaka. 1984. "On the Latin and Spanish passive", *Proceedings of the 4th Annual Meeting. Kansai Linguistic Society.* Oosaka.

³⁸ 三好(1995:382-388)は再帰動詞を、A.再帰用法、B.他動詞の自動詞化、C.相互用法、D.本来的な再帰動詞、E.特殊な用法、F.変化、G.受け身用法、H.無人称用法と分類している。とくにAとBの区分に注目したい。一般に、levantarseはこの分類のBに属するものとされるが、筆者は、これまでに述べてきた理由により、むしろAに組み込みたい。

- García, Erica C. 1975. *The role of theory in linguistic analysis. The Spanish pronoun system*. Amsterdam.
- Gili Gaya, Samuel. 1961. *Curso superior de sintaxis española*. Barcelona: Bibliograf.
- Goldin, Mark G. 1968. *Spanish case and function*. Washington D. C.
- Langacker, Ronald W. 1970. "Review of Mark G. Goldin. *Spanish case and function*", *Language*, 46, 167-185.
- Luján, Marta. 1979. "El análisis de los verbos reflexivos incoativos", *Revista Española de Lingüística*, 7, 97-120.
- Manteca Alonso, Ángel. 1976. "En torno al SE impersonal", *Revista de Lingüística Española*, 6, 167-180.
- Martin, John W. 1979. "Spanish reflexives and conventions of interpretation", *Romance Philology*, 33, 117-129.
- Morales, Amparo. 1989. "Algunas consideraciones sobre la alternancia subjuntivo- infinitivo en las construcciones con 'para'", *Nueva Revista de Filología Hispánica*, 37/1, 27-42.
- Richard, Frederick S. *Writing modern Spanish*. San Diego: Harcourt Brace.
- Schroten, Jan. 1972. *Concerning the deep structures of Spanish reflexive sentences*. The Hague: Mouton.
- 石崎優子. 1991.「Transitividad」*Hispanica*, 35, 16-31.
- 上田博人. 1998.「スペイン語の与格接語と間接補語(上)」『スペイン語学研究』13, 101-122.
- 影山太郎. 1996.『動詞意味論. 言語と認知の接点』くろしお出版.
- 佐藤邦彦. 1996.「スペイン語の他動詞自動詞両用動詞について」『スペイン語学研究』11, 45-64.
- 柴谷方良. 1997.「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112, 1-31.
- 高垣敏博. 1981.「Se 非人称文再考」*Hispanica*, 25, 93-111.
- 寺崎英樹. 1982.「se 統一説と分裂説」『宮城昇教授還暦記念論文集』335-349.
- 出口厚実. 1973.「格文法とスペイン語再帰文の動作主格」*Estudios Hispánicos*(大阪外国語大学イスパニア語研究室), 3, 57-73.
- _____. 1983.「SE 構文の分類と SE の種類についての小考」*Estudios Hispánicos*(大阪外国語大学イスパニア語研究室), 8, 1-13.
- 中右実. 1994.『認知意味論の原理』大修館書店.
- 三好準之介. 1995.「再帰動詞」山田善郎(監修)『中級スペイン語文法』382-388.
- 西川喬. 1995.「受動態」山田善郎(監修)『中級スペイン語文法』540-547.
- 全芝仁. 1996.「現代フランス語の中立動詞の自動詞構文について」『言語情報科学』(東京大学総合文化研究科・言語情報科学専攻), 1,115-131.

AUTONOMÍA Y HETERONOMÍA EN LA CONSTRUCCIÓN REFLEXIVA ESPAÑOLA

Hiroto UEDA

Dentro de los distintos usos de la construcción reflexiva, el tipo omnipersonal (el uso reflexivo, el uso recíproco, el uso enfático, etc.) presupone un elemento reflexivo del sujeto sintáctico coincidente con el AGENTE semántico, mientras que en el tipo unipersonal (el uso pasivo y el uso impersonal) no lo presupone y, en su lugar, se supone existir un "AGENTE:X" en el nivel semántico. El uso espontáneo está a caballo entre los dos. Presenta la forma única de tercera persona ("La puerta se abre por sí sola"), lo mismo que el tipo unipersonal; y, por otra parte, el sujeto está en posición preverbal y se reconoce cierta espontaneidad de parte del sujeto a diferencia del tipo pasivo (compárese con el pasivo: "Se abre la puerta"). Creemos que este uso se agrupa con el tipo omnipersonal, puesto que puede conjugar en otras personas si se presenta en una situación adecuada (por ej. "Ábrete, sésamo").

Llegamos a la conclusión de que se distinguen dos clases de la construcción reflexiva: (1) la autónoma (usos: reflexivo, recíproco, enfático y espontáneo), con el AGENTE referencial, la acción voluntaria o espontánea, el clítico correferencial con el AGENTE representado por el sujeto, el paradigma multiforme ('me', 'te', 'se', etc.), la posición del sujeto preverbal; y (2) la heterónoma (usos: pasivo e impersonal), con el AGENTE:X (indefinido), la acción sufrida, el clítico correferencial con el AGENTE X no coincidente con el sujeto, el paradigma uniforme ('se') y la posición del sujeto posverbal.